

Title	所得を中心とする経済理論の結構 (二、完) (営利と享楽)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.11 (1916. 11) ,p.1541(63)- 1562(84)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19161101-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に先ちて今回の大戦争に遭遇するに至りしかば爾來露國內に於て此戦争に鑑みて將來の其經濟政策を變更せざる可らずとの議論極めて多し而して過般巴里に開かれたる經濟會議の如き露國も亦熱心なる賛成者にして戦争終結後に其關稅政策の上に幾多の變更を見るに至る可しと思考せらるゝもの無きに非ず余は最初既に現はれたる此等意見の二三に付論評せんとする考なりしも餘りに長きに渡るの嫌あれば更らに他日を期し茲に擱筆することとせり。

M. Wallace: Russia, vol. II.

The Times: Russian Supplement.

所得を中心とする經濟理論の結構 (二完)

(營利と享樂)

小 泉 信 三

五

享樂の爲めに所得を投ずる場合に於ても個々享樂財の獲得に要する費用は客觀的事實なる價格形成に依て定めらる。或種類の夏帽子一個の代價金二圓なりとせよ。其種類の夏帽子が其市場に於て二圓にて賣らると云ふ事は何人にも共通の客觀的事實なり。たゞ二圓を投じて買ふ可き帽子が幾許の便宜快樂を與ふるや及び二圓なる費用が其人に取りて如何なる意味を有するかに至ては全然主觀的問題にして人に依て同じからず。或人は之を買ふ事に依て多大の便益を得、二圓なる價格は甚だ廉なりと感ず可く、又他の人は二圓は甚だ廉ならず、又甚だ不廉ならずと感じ、買ふも可、買はざるも不可なしと云ふが如き冷淡なる心理状態にある可

く更に他の人は帽子より受くる利用と投ず可き費用の二圓とを比較して帽子は余りに不廉なりと判断し、之を全然放棄するか或は他のヨリ廉價なる帽子を以て満足す可し。價格は何人にも共通の事實なれども其價格を費用額として見る時、個人の趣味性癖境遇所得の大小等個々人の行動を決定する事情は全然主觀的なり。而して所得の或部分の投用に依て受くる享樂の餘剰は或間接の方法に於て之を貨幣額に見積る、事を得れども、只間接に見積り得と云ふに過ぎず。例へば夏帽子が吾輩に與ふる享樂餘剰は余が必要上止むを得ざる場合にはその帽子の爲めに幾許を投ずる事を敢て吝まざるやを想像する事に依て貨幣額に引直ほす事を得可し。即ち余は其帽子より受くる便益少なからず、從てその帽子が二圓にて買ふと能はざる場合には其以上を投ずるとを敢て辭せず、止むを得ざる場合には三圓迄は敢て投ずるの意ありとすれば余が此購買に依て受くる餘剰享樂即ちマーシヤルが所謂消費者餘剰は此場合 $\frac{1}{2}$ なりと云ふが如し。然れども余が一個二圓の帽子を購ふ事に依て一圓に相當する餘剰利用を受くと云ふとは全く余一人に取りての事實のみ、余は何人に向ても一個二圓の帽子は之を購ふ者に一圓の餘剰利用を與ふと主張すると能はず。如何なる人に向ても共通なる客觀的事實は帽子一個が二圓にて賣らるゝと云ふ事實のみ、而して今余は假りに余が帽子を買ふ事に依て受くる餘剰利用を一圓と見積りたれども之はたゞ間接の方法に於て主觀的享樂餘剰を姑らく貨幣の稱呼に引直ほしたるのみ、餘剰享樂その者が直ちに貨幣の形に於て現はるゝには非ず。此點に於て享樂生活の目的と營利生活の目的とは全然性質を殊にするを見る可し。二圓にて買ひたる帽子を二圓二十錢に賣らば其差額は明々白々二十錢の貨幣額にて現はる。敢て之を二十錢に見積る必要なく、又之を二十錢に引直ほす必要もある事なし。吾人が享樂生活に於けるよりも營利生活に於て遙かに打算的合理的に行動し得る所以は茲に存するなり。享樂生活に於て吾人の求むる所は受くる所の主觀的享樂と投ずる所の費用との餘剰の最大ならん事にあり。此場合に費用は價格形成に依りて定まり、貨幣額を以て云ひ表はさるれども、一定の貨幣額が意味する重要な程度は全然主觀的にして人によりて同じからず、反之營利生活に於ては與へられたる二の價格間の差額の最大ならん事にして悉く主觀的要素を排除す。

或は營利行爲の結果として獲得せられたる所得は結局享樂の用に供せらる可き運命を有するものなるが故に其所得を贏得する營利生活と之を投用する享樂生活とは相連續するものにして相互引離す可らざるものなりと抗議するものあらん。然れど所得が結局享樂の用に供せらるゝの如何は今問題にあらず、重要な點は經濟行爲の目的が一度び所得の獲得なる單一の目的に集注し、更に第二段の行程として更に全然異なる目的に向つて出發する事實にあり。而して余は近代經濟生活の此の特徴を的確に把握する事が交易經濟的諸現象を正しく理解する上に於て第一の要件たる事を確信す。所得は猶ほプリズムの如し。プリズムが有ゆる光線を一度び吸収して更に新たに色を分ちて放射する如く、有ゆる經濟生活上の努力は一旦所得なる單一の目的物に集中し、而して新たに此所得より出發して個々現實の欲望充足即ち享樂なる目的に向て放散するなり。

六

「有價的」と云ふ事を原則とする交易經濟社會に於ては得の贏所得は直接には、必ず何等かの供給を意味し、所得の投用は必ず需要となりて現はる、(掠奪竊取等の違法行爲又は寄附贈與慈善等の無價的授受は現在經濟組織の根幹をなすものに非ず。従て今之を論外に措く)所謂企業家は商品又は勤務を供給する事に依て利潤を得、勞働者は勞働を供給する事に依て賃銀を、資本家は資本の利用を地主は土地の利便を供給する事に依て利子地代を受く。所得を得るには此一途あるのみ。何等かの形に於て所得を得んとするものは必ず何等かの形に於て供給を行はざる可らず。何物をも供給せざるものは交易經濟の下にありては何等の所得を要求する權利なし。他の一方に所得の投用は無價的に之を他人に與ふる場合を除き必ず需要となりて現はるゝものなり。所得獲得が他方に於て何等かの供給を意味すると同様に需要は所得の投用を俟つて始めて成立す。或特定の欲望を満たさんと欲せば人は之に適當する手段を獲得せざる可らず。而して之を爲すの途は所得の一部を投じて之を買ふ事に外ならず。繰返して云ふ、享樂(即ち所得投用)は需要を意味し、營利(所得贏得)は供給を意味す。今此二つを後段の説明の必要上マルクスの方式を假りて現はせば

享 樂

G—W

需要—製品

需要

營 利 $W—G$ 物品—貨幣 供給

($G—W$ は商品を得んが爲めに貨幣を $M—$ のは貨幣を得んが爲めに商品を提供する事を意味す)

七

所得投用論に於て論せらる可き最主要の問題は、余の見る所に従へば、如何にして人の欲望が所得投用なる過程を通じて始めて需要なる國民經濟的原動力となりて現はるゝかの一事なり。たゞ漠然需要は欲望に依て定まると云ふは太だ不精確にして學術的ならず。欲望と需要との間には所得の諸用途への配分なる過程ある事を明にせざる可らず。再び夏帽子の例を引かんに、月収二百圓の人が二圓の夏帽子を買ひたりせよ。二圓の代りに五圓の夏帽子を買はざるは何故なりや。帽子一個の爲めに五圓を投ずる事固より此人に取りては絶對的不可能事に非ず、而して五圓の夏帽子が二圓のものより大なる満足と與ふ可き事も亦略想像に難からず。然るに猶且五圓のものを捨て、二圓のを取る所以のものは此人の腦裡に於て 100 の三圓に依て購ひ得可き他の種類の満足と五圓の帽子が二圓の帽子に超過

して與ふる餘剰満足との比較行はれ前者は後者よりも大なりと判斷せられたるが爲めなり。斯の如く人が一定の價格にて或物を買はんと決意するは満たす可き諸種の欲望と之が手段たる可き所得額とを對照し所得額を是等諸種の欲望に配分したる結果なり。而して此所得配分に就ては動かす可らざる法則あり。此法則の確定に最も功績あるは欲望利用の研究に力を盡したるゴッセン以後ジエヂンス並に埃太利諸學者にして從來の欲望及利用學説は所得投用論中の此部分に於て其正當なる位置を見出す可きものなり。

一定額の所得を受くる人が其所得期間内に満たさんと欲する諸種の欲望を念頭に置き適宜に所得を是等諸用途に配分せんとするに當りて即ち如何なる欲望を如何なる程度まで満たし、如何なる欲望を不顧に附す可きやを決するに當りて、其の期する所は其定額の所得の投用より受くる所の享樂の最大ならん事にあるや論なし。此場合念頭に置かるゝ欲望の法則に二あり。

(一) 享樂(欲望満足)は之を繰返す事に依りて漸次減退し、遂には零に達すとの享樂遞減又は利用遞減法則(ゴッセン第一法則)及び

(二) 滿されたる欲望は或期間滿たされたるまゝの状態に止まれども其期間を經過する時は新たに再起すと云ふ欲望反覆の法則。人が斷片的經濟行爲を以て満足せずして永續的秩序的なる「經濟」を營むに至るは一旦滿たされたる欲望が滿たされたる儘に靜止せず時を経て再起し來るの事實を知るが爲めなり。而して人が一定の所得を以て一定期間内に於ける享樂生活を營まんとするに當りては或種の欲望を其瞬時満足せしめたる丈けを以て安心す可らざる論なし。必ず同じ欲望が時を経て再び起り來る事を考慮の中に置き、之に向て準備する所なかる可らざるなり。

而して此二法則を前提として出で來るを

(三) 多くの欲望ありて而して其凡べてを悉く滿たし了ること能はざる場合に欲望満足の最大量を得んが爲めには各の享樂を各の限界利用を相等しからしむ程度に於て止むと云ふ限界享樂平均若くは限界利用平均の法則(ゴッセン第二法則)とす。

所得を諸多の欲望に配分する場合之を支配する法則は所謂ゴッセン第二法則

には非すと云ふレキシムの反對 (Allgemeine Volkswirtschaftslehre, S. 32-33) は用語を餘りに狭く解釋したる嫌あり。一定の所得を以て二種以上欲望を滿たし而して之より最大の満足を得んと努むる以上、ゴッセン第二法則は論理的に必然の歸結なり。但しゴッセンは欲望満足其者のみを眼中に置き之が爲めに投ずる費用を閑却したる憾みあり、リイフマンは此點を指摘し、之に修正を加へて「限界收益(此場合には餘剩利用)平均の法則」 Gesetz des Ausgleiches der Grenzerträge を立てたり。之をゴッセン——リイフマン法則 Das Gossen-Liefmannsche Gesetz と呼ぶも不可なし。一定の所得を投じて欲望満足の用に充てんとする以上は費用の觀念、費用と利用との比較は吾人の念頭を去る事なし。吾人の關心事は享樂の絶對量の大小に非ずして、利用より費用を控除したる差額即ち享樂餘剩の大小に存すること勿論なるを以てリイフマンのゴッセン第二法則に加へたる修正は正當なる修正たること論を俟たず。今リイフマンの設けたる一例に従ひて此法則を説明せん。人あり、十二馬克を投じてABCなる三種の財を買はんとするに此三種の財の各單位が其人に與ふる享樂は左の如しとすれば

	A	B	C
第一單位	10	8	5
第二單位	9	7	4
第三單位	7	5	2
第四單位	6	3	1
第五單位	4	1	0
第六單位	2	0	
第七單位	1		
第八單位	0		

而して各單位の價格即ち之を得るに要する費用は均一にして何れも一馬克なりと假定すればゴッセンの第二法則は其儘適用せられ、彼は先づAの一單位より始め、Aの第二次でBの第一單位の順序にて十二單位を買ふ可し。然れども各種類の財の價格同じからざる場合には獨り利用のみを眼中に置くゴッセン法則は忽ち蹉跌す。例へばA一單位の價格は八馬克、Bは三馬克、Cは一馬克なりとせんに若し利用のみを眼中に置く時は十の享樂を與ふるAの第一單位を以て始めざる可

らずと雖、此十を得んが爲めには八馬克を投せざる可らず。従て一馬克なる費用が與ふる享樂の餘剰は $\frac{10-8}{3} = \frac{1}{3}$ に過ぎざる可し。次にBを買ふときは $\frac{8-3}{3} = \frac{5}{3}$ 之に反してCを買ふ時は $\frac{5-1}{4} = \frac{1}{4}$ 即ち一馬克の費用は四の餘剰を生ず。左れば此場合利用最も高きAを買ふは最も不經濟的にして不合理の所爲なり。最大量の餘剰享樂を得んと欲せば彼は先づCの第一單位を、次にBの第一單位を買ひ、更に再びCの第二單位を買ふ可し。斯の如くして彼はBの三單位の爲めに九馬克を投じ、Cの三單位の爲めに三馬克を投ずる事に依て三十一の總利用、即ち十九の餘剰享樂を受く可し。而して限界餘剰享樂はBの場合に於ては $\frac{2}{3}$ 、Cの場合に於ては一にして最も相近き限界餘剰享樂なり。今假に絶對利用最も大なるAを買ひたりとせんか其限界享樂餘剰は $\frac{1}{4}$ にして残る四馬克を如何に分配するも其の太しき不平均は免る可らず。即ち一馬克をCの爲めに三馬克をBの爲めに投ずる時は三種の財より受くる限界餘剰享樂は $A \frac{1}{4} B \frac{1}{3} C \frac{2}{3}$ 四となる可し。之れ容し難き不合理なり。(R. Liefmann, Die Entstehung des Preises aus subjektiven Wertschätzungen, Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik XXXIV. Bd. S S 25-33)

斯の如く與へられたる若くは豫想されたる價格を根據として限界餘利用平均の法則に従て諸種の欲望満足の爲めに所得が分配せらるゝや此に各人の各財に對する需要が決定せられ彼は需要者として國民經濟の原動力たる可く市場に臨むなり。斯の如く需要は所得分配の結果として成立するが故に一物に對する需要が獨り其物に對する嗜好又は價格の變動に依て動かさるゝのみならず同時に又他の財に對する需要を動かす原因に依りても影響せらるゝ事明なり。重要食料品の價格騰貴が多くの場合他の何等かの財に對する需要減退を伴ふが如きは此例證なり。

此の如く所得の配分は需要を定む然れども注意す可し所得の配當に依て定まる需要は悉く消費財正しく云へば享樂財に對する需要なる事を營利財若しくは資本財に對する需要は之を所得贏得論の中にて説き茲にはたゞ享樂財に對する需要は間接に營利財に對する需要を支配すと云ふ事のみを云ふに止め置く可し。

八

所得贏得即ち營利の用に供せらるゝ手段は分ちて二となす。(一)人即ち勞働(二)物

即ち經濟財是なり。勞働は廣き意味に解する時は或目的を達する心身の力作を凡べて含むものなれども經濟學にて云ふ勞働は凡べて支拂はるゝ勞働の意味なるを常とす。されば之を營利の目的を以てする心身の力作なりと定義する事を得可し。勞働なる手段によりて贏得したる所得を稱して勞働所得と名づく。經濟財が所得贏得の手段として供用せらるゝ時之を稱して營利財と云ふ。資本即是なり。營利財は享樂財に相對す可きカテゴリーなり。普通に行はるゝ消費財と生産財又は所謂上位の財と下位の財(メンガー)の分類が技術的概念を標準とするに反し茲に余が主張する享樂財と營利財との區別は全然交易經濟的標準に基づくものにして兩分類の間には論理上直接の關係なし。例へば帽子は技術的分類に従へば消費財なり然れども交易經濟的見地より見れば同じ帽子は享樂財なる事あり。營利財即ち資本なる事あり。自ら之を頂く者に對すると之を製造する者若くは之を賣らんとする者に對するとは其意味同じからず賣るものは營利の手段として之を見之を用ふるものは享樂の手段として見る。乗用自動車は享樂財なり。然れども同じ自動車は貸自動車會社の財産に屬する時其自動車は營利財たり。後の場合に於

ては所得獲得の手段として供用せられ、前の場合には所得投用の目的物として眺めらる。器械原料等或物の製作に供せらるゝ、要具は生産財として消費財と相對立せしめらる。然れども此區別に依る生産財は必しも營利財に屬せず。器械其他の生産資料は今日比較的多くの場合に於て營利の用に供せらるれども生産財が余の所謂享樂財たる事決して之なきに非ず。自家食用のパンを焼く可き竈自家用の裁縫器械の如き何れも生産財にして且つ享樂財たるものなり。

資本なる概念と所得獲得即ち營利と云ふ事とは斷じて之を相離して考ふ可らず。所得獲得なる目的なき所に資本なし即ち財は、所得、を、境、界、と、し、て、或は、享、樂、財、たり或は資本たり。或は賣買價值を有する財は即ち資本なりと説くものあり。然れども賣買價值を有するもの悉く資本なりと云ふは財は即ち資本なりと云ふ事に歸着す。併乍ら此説明は吾人を満足せしめず。吾人は日々食ふ所の食物、着る所の衣服を資本と認むる事なし資本に必ず伴ふ所の概念は資本たる事是なり。而しても、ど、で、は「本も子も」の本にして必ず、或者の源泉たる事を意味す。親が子ありて始めて親なるが如く資本も亦或もをの生む源として始めて之を了解する事を得可し。然らば

何を生む時に財は資本となるか。答て曰く、所得を生むとき所得の源泉たるとき始めて財は資本となる。而してこの場合生むと云ふ言葉は今日全然私經濟的の意味に解せらるる事を忘る可らず。技術的に或物を造り出すと云ふ意味には非ずして、或物が新たに一經濟單位の所有に歸屬すと云ふ意味なり。例へば貸金の資本たる子を收むる場合技術的には一物の作り出さるゝ事なしと雖此貸金の資本たる事を疑ふものなし。私經濟的には貸金が所得の源泉となるを以てなり。否資本の資本たる本性は此の如く技術的觀念に依て煩はさるゝ事なき場合に於て最も純粹明瞭に現はるゝを見る。カール・マルクスが資本論第一卷第二篇「貨幣の資本化」(Verwandlung von Geld in Kapital)に於て詳説する所最も當を得たり。貨幣其物は資本に非ず、然らば貨幣は如何なる場合如何にして資本となるか。マルクスの答ふる所に従へば貨幣は餘剩價值を生ずるの目的に供用せらるゝ場合に於て始めて資本となる。資本は即ち餘剩價值を生む價值 Mehrwert Heckender Wert の義に解す可し。餘剩價值を生む價值と云ふは稍々形容的表現なり、平明の語に引直せば所得獲得即ち營利の目的に供用せらるゝ經濟財との意味に外ならざる可し。財は享樂の用に供せら

る、時享樂財となり、營利の用に供せらるゝ時資本となる。其財が技術的に如何なる性質を有し、又如何なる形態を具ふるかは問ふ所に非ず、土地も家屋も器械も器具も原料も之が營利の目的に供用せらるゝ限り悉く資本なり。要點は財が所得獲得の手段として用ひらるゝか、或は所得投用の目的物として認めらるゝか、營利の手段たるか、享樂の手段たるかの點にあり。或は又從來屢々土地と資本とを分つものあれども、當を得ず。資本の本質は其營利の用に供せらるゝの一點に集まる。而して此一點に於ては土地と生産されたる生産要具とを區別す可き道理なし。生産されたる事は決して資本たるに缺く可らざる要件に非ず、同時に「生産要具」たる事は直ちに資本を成立せしむるものに非ず。既に前に述べたるが如く「生産要具」は技術的の概念にして私經濟的概念たる資本との間に直接には論理的關係なし。たゞ今日生産は殆ど全く營利の一方方法として行はるゝが故に、技術上生産要具たるものは極めて多くの場合に於て營利の用に供せられ、此徑路を経て資本となるに過ぎざるなり。而して土地は他の財と同じく享樂の用に供せらるゝ事あり、營利の用に供せらるゝ事あり、營利の用に供せらるゝ時固より資本たるに於て妨ぐるものに

非ず。固より土地は他の財に比して技術上特異の點を有する事なきに非ず、此點を標準として之を他と區別するは決して妨げなし。たゞ土地は資本の一下種に過ぎず、斷じて資本と相對立せしむ可きものに非ざる事を忘る可らず。

資本に依て受くる所得を資本所得と云ふ。資本所得の勞働所得に對する重要な一特徴は勞働所得にありては所得額の問題のみ存するに反し、資本所得にありては資本額と之より生じたる所得額との對照に依て必ず率の問題起る事是なり。

九

享樂は需要となりて現はれ、營利は直接には供給となりて現はるとは既に述べたり。特に直接には、と注意たるは營利行爲は間接には需要となりて現はるゝ事あるを以てなり。然れども此場合に於ては需要が需要に終る事なし、需要は必ず供給の爲めに行はる。賣らんが爲めの買、更に嚴格に云へば、より高く賣らんが爲めの買、
Kaufen um teurer zu verkaufen なり。世人周知の如くマルクスは之を左の式にて示せり。

$$G-W-G \quad G=G+\Delta G$$

(G-Wは需要、W-Gは供給を現はす事前述べたり。もとよりWは狭く商品の義

に解する必要なし。貨幣を投じて勞働を買ひ、その生産物を賣りて利潤を收むる場合にも此方式は當然適用せらる。賣らんが爲めに買ふ場合に於ては當事者に對する利用享樂の問題全然起る事なし。商人が商品を買入るゝに當り、其商品例へば帽子の品質其物は彼の願慮するところに非ず。帽子が如何なる便益を彼に與ふるかは問題に非ず。彼はたゞ帽子が幾許の利潤を彼に齎らすかを考慮するのみ。彼は營利の手段としてのみ之を見る。彼はたゞ一定の「量」として之を見る。質は顧るところに非ざるなり。質はたゞそれが利潤の量に影響する限りに於てのみ考慮の中に入り來たる。而して利潤は與へられたる二の價格の差額より成る。價格は純客觀的事實にして價格と價格との差額は個人の性癖傾向等の主觀的要素より全然獨立し何人にも共通の事實なり。商人が商品を買入れ又製造業者が原料を買入れ又は勞働者を雇入るゝ場合と消費者が同じ商品を買ひ、又は勞働者を雇入るゝ場合とにては其需要又は購買の動機を決定する要件同じからず。消費者の場合に於ては購買は彼の所得額と豫想されたる享樂とに依て定めらるれども營利的購買を決するものは彼が運轉利用し得る貨幣資本額と豫想されたる利潤と是なり。されば

享樂財は所得に依て支拂はれ、資本財は貨幣資本に依て支拂はると云ふ事を得可し。而して營利者が購買者として現はるゝ場合吾人は「投資」なる概念を得、營利の目的を以て貨幣を投じて財を買ふ事、換言すれば貨幣資本を資本財又は勞働に變形する事是なり。G-W-G なる方式の前半是なり。但し G-W は其自身「投資」を成立せしむるに非ず、Q-Q なる利潤を目的とする場合に於て購買は始めて投資となる。單に享樂を目的とする購買は「投資」に非ず。吾人が僕婢を雇ひて給料を支拂ふは投資に非ず、反之工場主が職工を雇ひて賃銀を支拂ふ場合には「投資」となる。前の場合に於ては購買の目的とする所日常生活の便益にあれども、後の場合に於ては賃銀として投じたる以上を利潤として回収せん事を期するを以てなり。

「有償的」を原則とする交易經濟組織の下に於て所得の投用は需要となりて現はれ、所得獲得は直接には供給として間接には需要として現はるとは既に再三述べたる所なり。而して所得投用に依りて生ずる需要と所得獲得の爲めにする需要との間には重要な差別ある事及び所得獲得の目的を以てする需要は必ず「投資」の意味を有する事右の如し。左れば同じ事は少しく用語を改めて次の如くにも云ひ現

はす事を得可し。曰く、所得投用行爲は需要として現はれ、所得獲得の行爲は投資及び供給として現はれ、以て國民經濟生活の根本動力となる。

十

以上余は國民經濟に生命を附與する原動力は經濟單位の私經濟的努力にある事、而して私經濟的努力は何れも所得を中心とし、所得を基礎として出發するものは享樂にして、所得を目標として之に向て集中するものは營利なる事、而して享樂は需要となりて、又營利は供給及び投資となりて現はるゝ事を述べたり。然れども吾人の經濟生活中には此二つの何れにも屬する第三の方面あり。即ち手段より見れば所得の投用に屬し目的より見れば營利に屬するものは是なり。即ち所得の投用に於て享樂ならざるもの、所得の獲得にして而して所得の投用を以て出發するもの、換言すれば目的も手段も共に所得なる場合は是なり。之を貯蓄、即ち新資本の形成の場合なりとす。資本は人が其所得を全部享樂の用に供し悉くさずして、一部を利殖の爲めに保留する事に依て成立す。アダム、スミスが資本は節約に依て生ずと云へるは此意味に解す可し。固より死蔵は此に所謂貯蓄に非ず、資本は單に所得の一

部が保留せらるゝのみに依て成立するものに非ず、其保留が將來の所得増加の爲めに行はるゝ事に依て始めて成立し、此の如くにして所得を生む資本は所得の中より生れ來る而して新資本の形成は國民經濟上に於て結局供給を目的とする需要、即ち投資的需要として現はる。國民經濟は新資本の形成あるに依て獨り生活するに止まらずして實に能く成長す。即ち所得獲得の目的を以てする所得の投用に觸るゝに至りて吾人は經濟理論の *Static* より出で、*Dynamik* の領域に入るものなり。

此小論文に於て余は個々經濟理論の内容に何等を加へ得たりと信せず、たゞ余が試みんと欲する所は如何に經濟理論を結構す可きかに就て私見を述ぶるにあり。余は經濟單位の生活が所得を中心として之に集中する一面と之より放散する一面との二方面ある事を見たり。而して個人の私經濟的努力を原動力とする交易經濟のメカニズムを論理的に了解せんが爲めには此二方面の努力をたどり行く外途なし。而して斯くする事に依て余は如何に所得の投用が需要となり、又所得の獲得が供給及(第二次的に)需要となりて現はるゝか、又如何にして所得獲得の目的

を以てする所得の投用に依て新資本が形成せらるゝかの徑路を示し得たりと信ず。繰返して云へば現代經濟社會に於て所得は實に猶ほプリズムの如し。プリズムが有ゆる光線を吸収し、而して色を分ちて新たに之を放射すると等しく有ゆる經濟生活上の努力は一度び所得に集中し、更に新たに個々の目的物に向て放散す。而して「個々の目的物」の供給者は又所得に向ての努力として其供給を行ふなり。是れ余が經濟理論結構の中心に所得を置かんとする所以なり。(完)

戦争と金利

高城 仙次郎

目次

- 一、緒言——二、金利騰貴の原因——三、戦争は常に金利を騰貴せしむるや——四、金利騰貴の防止策

一 緒言

讀者の知らるゝ如く、今次の大戦争が勃發して以來歐洲金融市場に於ける金利は著しく騰貴して居る。開戦前の半々年は金融比較的緩漫であつて、歐洲金融界の晴雨計とも稱す可き英蘭銀行の公定歩合は一月二十九日(千九百十四年)三步に定められたる儘にて七月下旬に至つたのであるが大陸の風雲急と爲るに及んで同月三十日突如として四分に引上げられ、翌日には又一躍八分、其翌日八月一日には更に一割に改定せられたが、六日には六分を引上げられ、八日には更に五分に改め